



## 故障診断の力が解く、 多文化共生の組織づくり

小笠原 武さん 株式会社ATグループ  
Takeshi Ogasawara

自動車整備士の担い手不足が深刻化する中、急速に増え続ける外国人整備士たち。

現場で彼らと日本人をつなぐ「橋渡し役」として、新たな組織づくりに挑んでいるのが小笠原武さんだ。

株式会社ATグループで、外国人整備士たちの教育やマネジメントを担う小笠原さん。「メンテナンスの技術は訓練すれば何とかなりますが、難しいのはその先にある故障診断です」と、JICA海外協力隊（JOCV）として、タンザニアの職業訓練校で自動車整備の指導をした経験を振り返る。現場の整備士からキャリアを積み上げてきた小笠原さんの歩みを紐解くと、故障したエンジンを直すことと、組織の課題を解決することの、意外な共通点が見えてきた。

### 小笠原さんの現在地

言葉の壁を「歩み寄り」で越える

いま日本の自動車業界は大きな変化を迎えている。「自動車整備は、国内で

は人気がある職種とは言えません。その一方で、特定技能制度などの追い風もあり、現場の外国籍人材は急速に増えています」と小笠原さんは語る。実際、国内の自動車整備学校の多くが外国籍の生徒となり、新入社員の6～7割を占める現場も珍しくないという。

そうした中、小笠原さんはネパール人やベトナム人を含む多国籍チームのリーダーとして、外国人整備士たちが日本の現場で円滑に働けるための仕組みづくりに奔走している。現場からは、「言葉が通じない、何とかならないか」という切実な声が届く。しかし「実際に行ってみると、言葉の問題だけではないことが多いんです」と、小笠原さんは指摘する。日本人が良かれと思って使う曖昧な表現や遠回しな言い方が、かえって

彼らを混乱させているのだ。

こうしたコミュニケーションの課題を解決するために、小笠原さんが注目したのが「やさしい日本語」だ。「外国人整備士たちの日本語能力向上はもちろんですが、日本人も『やさしい日本語』を知り、歩み寄る。そんな『やさしい世界』を社内に作れたらいいなと思っているんです」若くして日本企業に採用され、誇りを持って働く外国籍人材。彼らに対し





教員向けに自動車の電気装置の授業を実施



自動車整備コースの生徒に対して講義・実技を担当した



共に働く外国籍人財育成チームメンバーと

て、海外で働く厳しさを知る小笠原さんだからこそできる、多角的なアプローチである。そこには、20年以上前のタンザニアでの経験が、いまでも色濃く息づいている。

## JOCV時代

### 「自力で直す力」を授ける

小笠原さんが派遣されたのは、タンザニアの中堅都市にある職業訓練校の自動車整備コース。しかし、活動開始から間もなく、共に歩むはずだったカウンターパートが病気で亡くなるという事態に直面する。「しばらくは、何をしに来たんだろうという思いがありました。しかしある時、日本の援助で入った立派な機材が、使われなまま残っていることに気づいたんです」悲しみが癒えぬ中、小笠原さんは学校併設の工場に生徒を集め、機材の活用に取り出した。こうして、実際の故障車を修理しながら技術を伝える日々が始まった。

当時、現地の自動車市場には変化が起きていた。海外からの中古車流入に伴い、車の構造が従来の機械式から、コンピューターを搭載した電子制御式へと移り変わっていたのだ。「目に見える破損は直せても、目に見えない電子システムの不具合には手が出せない」と、独自の教材を作り、電子制御の基礎知識を教える授業をスタートさせた。休日返上で、希望する生徒たちに教えることもあったという。「卒業してストリートに出れば、自分の実力だけで稼がなければなりません」技術を指導する立場として

小笠原さんがこだわったのは、表面的な成績ではなく、徹底的に「自力で直す力」を身につけさせることだった。

## 未来へのビジョン

### 組織の整備士として

小笠原さんは、自動車整備士としてのキャリアと、現在のマネジメント業務には明確な共通点があると考えている。「自動車整備には、定期点検などの『メンテナンス』と、原因不明の不具合を突き止める『故障診断』の2つがあります。いまの仕事は、まさに組織における『故障診断』なんです」現場で起きている問題の原因を切り分け、必要な情報を集め、関係者をつないでゴールへ導く——こうした課題解決のプロセスは、まさに故障診断に挑む思考回路と一致する。

現在、小笠原さんは、急増する外国

### 小笠原 武さん プロフィール

株式会社ATグループ サービス部 業務課 課長。1997年、愛知トヨタ自動車株式会社に入社。自動車整備士として現場でキャリアを積み、2004年から2年間、同社所属のJICA海外協力隊としてタンザニアへ派遣された。

籍人材といった避けて通れないメガトレンドと向き合っている。自らが「外国人」としてタンザニアで暮らした経験と、自動車整備の現場で培った課題解決の力が、今まさに試されている。

最後に、これからJOCVを目指す人々へのアドバイスを求めると、自身の人生を振り返るようにこう語った。「迷っているなら、挑戦したほうがいい。検討できている時点で、チャンスは目の前にあるということ。私自身、あの時に行ったことが、いまの自分を支える大きな自信になっていますから」



系列校の教員向けワークショップ